

先生の専門分野と、
その原点を教えてください

専門は現代中国社会です。特に1978年の改革開放政策によって現在の体制になってからの中国が研究対象です。一人のチャイナウォッチャー、研究者、そして教育者として、「アカデミズム」と「ジャーナリズム」の間を行き来し、「歴史研究」と「現状分析」の架け橋になれば、と考えています。この4つの切り口で現代中国の社会を分析しています。

原点は10歳の時に観た『長江』というドキュメンタリー映画です。歌手のさだまさしさんが「長江の最初の一滴が見たい」という情熱で、長江に沿って旅をして、中国人と交流していくのです。私はこの『長江』に映る中国の雄大さや、中国人の人情に感銘を受け、中国に憧れを抱きました。



さだまさしが監督した長編映画『長江』。1981年11月公開。長江流域で暮らす人々をフィルムで撮影した世界初の作品。



中央大学教員に
研究のアレコレを聞く
インタビューシリーズ

まるちあんぐる

The interview series

文学部准教授
おいかわ じゅんこ
及川 淳子



OIKAWA Junko

Profile

桜美林大学文学部、同大学院国際学研究所博士前期課程修了後、慶應義塾大学通信教育部法学部卒業、日本大学大学院総合社会情報研究科博士後期課程修了。博士（総合社会文化）。外務省在外公館専門調査員（在中国日本大使館）や桜美林大学での講師などを経て、2018年より現職。現代中国に関する翻訳書や著書多数。

「中国」に学ぶ自由の尊厳 同時代を生きる隣人

初めて中国を訪れたのは20歳の時。念願だった長江流域の一人旅は、約1カ月に及びました。大学の卒業論文のテーマは、長江に建設が計画されていた「三峡ダム」でした。孫文が構想を練り、1950年代には毛沢東が号令を出したものの、李鋭という人物が毛沢東にNOを突きつけたダムです。その後1994年に着工して2009年に完成しましたが、1950年代当時、李鋭は環境への悪影響などを考慮し、大型プロジェクトだからこそ民主的な議論が必要なのだと大胆にも物申して、それが評価されて毛沢東の秘書になりました。

李鋭は共産党員でありながら、

1989年の天安門事件の際には、人民解放軍による武力弾圧に反対し、党籍を剥奪されそうになりました。のちに自分の著書が中国国内では出版できなくなるなど、言論弾圧の対象になつてしまうのですが、一党支配体制のなかでトップに抗う反骨の黨員がいたという事です。中国のリベラリズムと

いうべきか、「党内民主」や「言論の自由」を守り、新しい中国をつくっていくこととする多様な言論が確かにそこにあったのです。

2019年は、1989年の天安門事件から30年となる節目の年です。豊かになる中国で起きた衝撃的な事件。私は当時高校生でしたが、自分とそ

年齢の変わらない中国の若者が何を訴え、中国社会をどうしていきたいと思つたのか、知りたいと思いました。あのころから私の探求心は変わっていないのかもしれませんが。

李鋭という人物は
非常に興味深いですね

李鋭は中国共産党の長老で、現在は101歳で入院中ですが、長年にわたるヒアリングを行っています。きっかけは約20年前、複数の大学で中国語の非常勤講師を掛け持ちしながら、夏に北京大学で短期研修をしていたころです。「李鋭に会ってみたい！」の一心で共産党のある部門に電話をしてみました

た。怖いもの知らずとはまさにこのことですが、「おもしろい日本人がいる」と李銳本人に会わせてもらうことができました。

ほかにも天安門事件に関わった人物では、2010年に獄中にいながらノーベル平和賞を受賞した劉曉波との親交もありました。劉曉波は1989年の天安門事件直前、当時は北京師範大学で教員の職に就きながら、研究のためアメリカに滞在中だったのですが、教え子たちが天安門広場に集結する姿を見て急遽帰国。学生たちを平和的に撤退させようと、人民解放軍・戒厳部隊との交渉役を担ったほか、武装した学生から銃を取り上げるなど、徹底して平和的な民主化運動を推進した人物でした。

劉曉波はその後、政府に民主化を求める文書『08憲章』などの執筆活動を続けますが、国家政権転覆扇動罪に問われ逮捕・投獄されました。それでもなお中国国内で活動を続けることになりました。2017年に亡くなりました。交流を重ね、共感する部分が多かったからこそ、私の役目として書籍の翻訳や講演などを通して、命をかけて言論の自由を守ろうとした彼の信念や生き様を伝えていきたいと考えています。

劉曉波のような「自由派知識人」と

呼ばれる中国人は、逮捕などの弾圧を受け、外国に亡命する人も少なくありません。それが現代中国社会の現実です。劉曉波夫人の劉霞とも親しくしていましたが、劉曉波の妻であるという理由だけで8年間にわたって自宅軟禁状態にありました。厳しい監視下であり、私も会うことができませんでした。彼女の境遇が心配でたまりませんでしたし、中国政治の厳しさに打ちのめさ

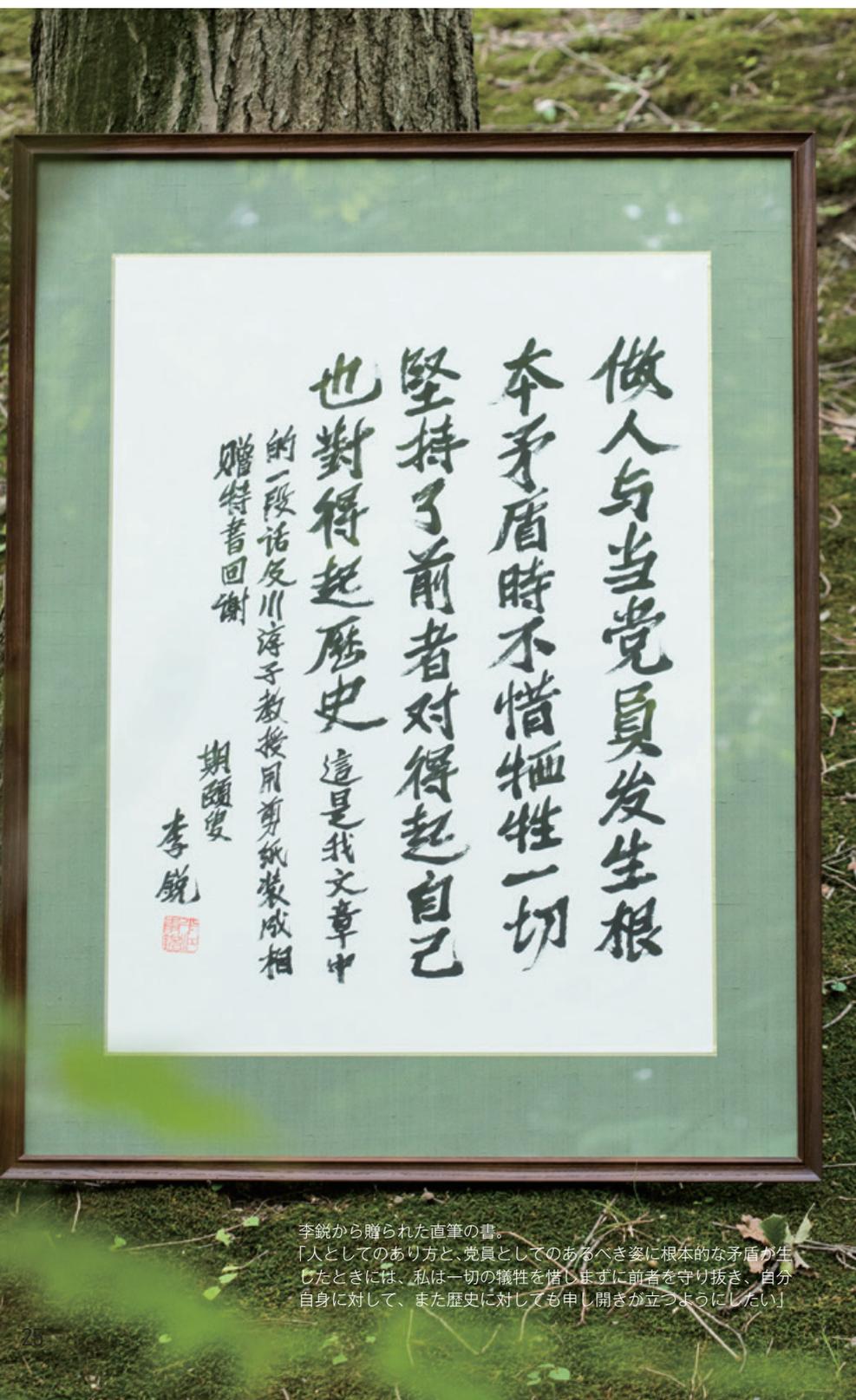
れることも少なくありませんでした。今年の夏、彼女はドイツに渡ることができましたが、まだ完全に自由ではありません。

活発な交流は何が原動力になっていくのでしょうか

共産党員として中国の民主化をめざした李銳、一方でその共産党に立ち向かい、共産党の外から自由な中国をめ

ざした劉曉波、共産党の内と外の人物と関わってきましたので、研究対象との距離感や立ち位置について批判を受けることもあります。私自身は矛盾はありません。

人と会って話をすることで新たな気づきがあり、感動的なこともあります。それがモチベーションになります。必ずしもアカデミックなモチベーションだけではなく、ひたすらに



李銳から贈られた直筆の書。「人としてのあり方と、黨員としてあるべき姿に根本的な矛盾が生じたときには、私は一切の犠牲を惜しまずに前者を守り抜き、自身自身に対して、また歴史に対して申し開きが立つようにしたい」



「行ってみたい」「会ってみたい」、「話を聞いてみたい」と思っています。

そのうえで、私は同時代を生きる「隣人」として、私たちが手にしている「学問の自由」や「言論の自由」によって、中国の実情を伝えていくことに使命を感じています。中国人のすべての喜びや悲しみ、苦しみを共有することはできませんが、中国に関わる者として、翻訳や執筆、教員としての仕事も、どれもバトンを手渡すように「伝えていく」ということに変わりはありません。人との出会いによってインプットしたものを自分なりにアウトプットしていくことで、よき連鎖を生みみたいのです。現在の中国をどう見るのかという問題は非常に難しいですが、「共感」と「批判的なまなざし」の両方で中国社会を見つめるとともに、民主社会と

いわれる日本自体を見つめ直す契機にしたいと考えています。

先生の目に中国はどうか映っているのでしょうか

中国は「一党独裁」「強権支配」といったステレオタイプイメージで語られることが多いですが、「中国」中国共産党」ではありませんし、中国国民の「愛国心」は、「愛党心」とイコールでもありません。ですから、まずは多様な中国を見て知ってほしいですし、触れ合ってほしいと思います。日中間の係はあまり良好とはいえませんが、多くの観光客が来日するほど行き来もありません。日本に関心を持つ中国人が増えている一方で、日本人の対中理解は進んでいるでしょうか。

日本と中国は政治体制や社会制度は

違えど、庶民の暮らしや、少子高齢化社会など、共通の話題で語り合えばとても盛り上がりがあります。要は関心の寄せ方次第です。

近年の中国に目を向ければ、電子マネーが浸透し、キャッシュレス化が進んでいます。党主導で集中的にIT政策を進めているからです。2008年に四川大地震が発生した際には、手抜き工事による人災もありましたが、住宅や市街地の再生をはじめとする復興事業は数年で完了しました。一方、日本では、東日本大震災後を例にしても、復興に時間がかかっています。民主主義社会で議論を尽くせば政策決定には時間が必要で、時には非効率率になりまじし、もどかしさや憤りを感じることもあります。中国では一党独裁による強制力があるからこそ、大局的には効率よく復興できたと評価する声を聞くこともあります。

また、経済的に豊かになれば、政治も民主的になると考える人は多いですが、いまの中国は豊かになればなるほど権力の強化が進んでいます。それでも、中国経済の影響力の大きさは世界的な関心ですから、中国的な統治システムを結果的に支持する国家がないわけではありません。

中国社会は「カエル跳び現象」とい

われるほど変化が速く、そのカエルがどこに跳ねていつてしまうのかとても気がかりです。中国を訪れるたびに新たな発見や驚きがあり、現実の厳しさに翻弄されることばかりですが、激動の中国を隣国から見つめる私たちは、確かに歴史の転換点に立っているのだと思います。

中国に自由はあるのでしょうか

一党独裁の強権的な政治体制下で、言論の自由などは厳しく規制されていますが、限定的な「自由」は享受できるようにになりました。ある側面では、中国はとても豊かで自由になったのです。ただ、権利意識が目覚めて、政治体制に疑問をもつ人もいます。限定的な自由を謳歌しつつ、衣食住が満たされる豊かさだけではない「自由」や「権利」について考え、悩み、時に抑圧される中国人と、同じ時代に生きる日本人がともに考えるべきことは少なくともいはずです。

印象深いのは、「中国から何を学べばいいのか」という学生からの問いです。劉曉波のように、抑圧されながらも、たくましく生きる中国人から学べることもあるでしょう。市民が主役となる新しい中国社会をつくらうと考え、行動

する人々と出会って語り合ってほしいと思います。中国の人々には、日本の民主主義の良いところも悪いところも知ってほしい。日本の姿を中国の人々に伝え、「民主」や「自由」について、そして「市民社会」について議論することが大切です。そのためには、前提として言論の自由が保障されなければなりません。

一方で、「自由」「人権」「民主」といったいわゆる普遍的な価値は、果たして本当に普遍的かという熟考すべきポイントもあります。中国共産党が語る「自由」や「民主」は、必ずしも他の民主国家での「自由」「民主」と同じではありません。会いたい人に会い、言いたいことを言う。読みたいものを読み、書きたいことを書く。そうした日本人が当たり前のように享受している自由の尊さを、中国人との語らひのなかで教えられ、考えさせられます。

最後に、学生やご父母の方々へメッセージをお願いします

「教える」という仕事は、上海に留学していた時に、夜間大学で日本語教師のアルバイトをしたことが始まりです。学生のほとんどは、文化大革命で若いころに学ぶ機会を奪われた中国人

同時代を生きる隣人
「中国」に学ぶ自由の尊さ



多彩な領域で活躍

ノーベル平和賞受賞者劉曉波の著書の翻訳や彼に関する論評からNHK ラジオの中国語講座の講師、中国語会話教則本の執筆まで、幅広い視点で中国を捉え、精力的に情報発信を行っている。

でした。仕事が終わったあとに学びに来る意欲の高さと真剣さに心打たれました。日本語を習得して仕事に活かしたい、未来を変えたいというバイタリティーを感じました。その経験もあり、「教育とは、ともに未来を語ること」だと考えています。知識を伝えるだけでなく、自ら学ぶ方法を教えながら、社会に出ていく前の学生たちとともに未来を語り合いたいと思います。もし心の中に疑問が沸くことがあったら、封印することなく自分の言葉で語ることでできるようになってほしい。何かおもしろいと感じたら、おもしろいと発言し、行動を起こすことが、未来を明るくする一歩になるからです。

また、外国語を習得すれば必ず強みとなり、人生を豊かにできる可能性が広がります。全世界で使われている中国語も、新たな扉を開くカギになります。語学は他者と語り合い、他者を知ること、自分の考えを深めるための道具です。人は自ら考え、自分の言葉で語り合い、生きていくもの。誰かの言葉に心を動かされたり、生きる指針になるような言葉があったりと、人は言葉とともに生きていきます。現在、私は教職課程も担当していますが、教員志望の学生には、言葉のチカラ、そ

して、言葉の怖さを意識しながら、言葉を大切にする教員になってほしいと願っています。

中央大学には、中国からの留學生もいれば、残留孤児3世の學生もいます。そうした學生たちとともに劉曉波や李銳の生き様に触れ、現代中国事情を学び、自由や民主について学ぶ科目もあります。中国からの留學生は、中国国内とは異なる視点から幅広く学ぶこともできます。私がかつて『長江』に感銘を受け、自分の進路を切り拓いてきたように、今度は私が學生を行動に駆り立てるようなバトンを渡したいと思っています。「行動する知性」を掲げる中央大学で、高い知性と強固な信念をもって行動する學生を育てていきたいと考えています。

●著書紹介

『現代中国の言論空間と政治文化
—「李銳ネットワーク」の形成と変容—』
(御茶の水書房)



中国の言論空間において、毛沢東の元秘書でありながら改革派として活動する李銳と、そのネットワークについて調査・分析。2016年に停刊となった月刊誌『炎黄春秋』をめぐる政治力学や、「一二・九知識人」の活動などにも鋭く斬り込んでいる。

中央大学教員に
研究のアフレコを聞く
インタビューシリーズ
Multi
Angle
vol.10
まるらあんどる